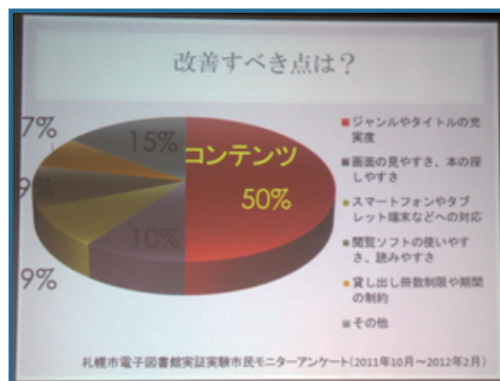


札幌市中央図書館の電子図書館実証実験

続いて、札幌市中央図書館情報化推進担当係長の浅野隆夫氏は、2011年から行われている電子図書館の実証実験について報告。市民モニター450名が参加したインフラ・デバイス実験（電子書籍の貸し出しと返却などの体験）や、札幌市内の出版社や行政・市民発の地域資料を生かしたコンテンツ調達実験などが柱となる。

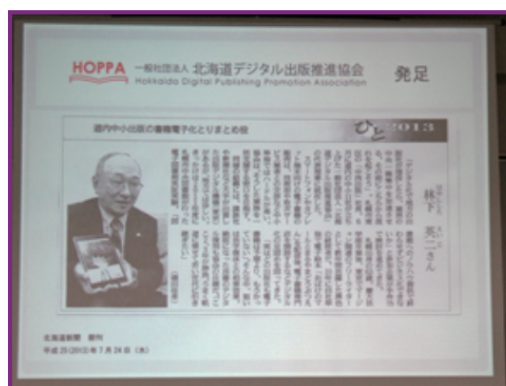


札幌市中央図書館情報化推進担当係長の浅野隆夫氏

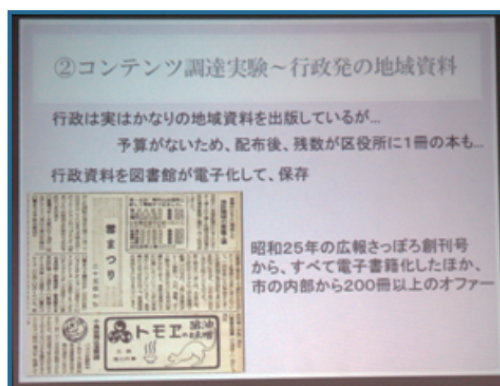


実証実験市民モニターアンケートでは、改善すべき点としてジャンルやタイトルの充実度を挙げる人が半数だった

コンテンツ調達実験では、札幌市内の出版社に依頼し、札幌市中央図書館が底本を預かり電子化するという形によって、2011年には16社200点の協力が得られた。しかしこれは、「実験だから参加してもらえた」という側面が強く、翌2012年は「さっぽろ電子書籍流通検討会」という形で、価格やライセンスなど調達のルール作りと、図書館によるPRを通じて書籍販売に繋げる試みがなされた。これがきっかけとなり、出版社の団体である一般社団法人北海道デジタル出版推進協会が設立されることになったという。



札幌市中央図書館の電子図書館実証実験がきっかけとなって設立された出版社の団体、一般社団法人北海道デジタル出版推進協会



昭和25年の広報さっぽろ創刊号からすべてを電子化

また、「地域貢献」を目的とし、学校へ端末を持ち込み体験学習を行ったり、行政発の地域資料の電子化を図ったり、市民作家プロジェクトによって図書館自らがポーンデジタルの出版社になるような試みも行なっているようだ。今後の課題はハードやシステムではなく、「読みたい本がない」というコンテンツ面だとし、「『本の館』というだけでは生き残れない」という浅野氏の言葉が印象的だった。